

実践報告(Report)

保育を広げる

——絵本の読み聞かせ実践を通して——

Child care expansion: Reading comprehension with picture books

齋藤 善郎*
SAITO, Yoshiro*

摘 要

現行の幼稚園教育要領における領域「言葉」の、内容(9)において、「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」という項目があり、幼児が絵本と一緒に見たり聞いたりすることで、同じ世界を共有する楽しさを味わったり、新たな世界に興味や関心を広げていく過程を大切にすることが求められている。さらに、内容の取扱い(3)において、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせるなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」が保育実践において必要であると述べられている。活字離れが喧伝される今日、家庭や幼稚園という場において、絵本がどのように扱われているのだろうか。その実態を把握するとともに、保育の現場で、どのように絵本が使用され、読み聞かせがなされているか、実際の姿を報告する。

キーワード：絵本の読み聞かせ、家庭と絵本、幼児の主体性、劇あそび

Key words : Reading comprehension, Home & Picture books, Independence, Role playing

1. 研究の背景と目的

幼児は、日常生活に必要な言葉が分かるようになるにつれて、言葉で伝えたい経験を重ねていく。こうして、相手の話を聞こうとする意欲や態度が育てられ、言葉に対する感覚や言葉で表現する力が養われていく。幼児のこうした育ちのためには、幼児同士の対話の経験や応答的な環境の中で伝え合う喜びを感じ取る体験が必要であるが、それと同様に、絵本や物語などの読み聞かせも大切な要素である。読み聞かせを通して、幼児とそれを読んでもくれる大人との心の交流が図られ、読んでもらった絵本や物語に特別な親しみを感じ、新たなイメージを広げていく。こうした経験を通して、豊かな言葉がはぐくまれ、自己の感情をより精緻に他者に伝える力の基礎を育てる。また、自己の思いを自分なりにモニタリングし、洞察する力の育ちへとつながっ

ていく。

近年、幼児を取り巻く環境の中に、様々な情報メディアが存在するようになった。嘗て、幼児の周りにあるものは絵本・紙芝居が中心であったが、テレビ・DVD・スマートフォン等がそれに変わりつつある。実際、幼児が幼稚園からの貸し出しの絵本を持ち帰ることが減っていることを実感する。では、家庭の中では絵本はどのように扱われているのだろうか。

本篇では、まず家庭において、幼児がどのように絵本と出会いかかわっているのか、絵本の読み聞かせはどの程度なされているのか、保護者へのアンケートの結果から分析をしたい。また、それと同時に、幼稚園の中で幼児が絵本に向き合う環境を保育者はどのようにつくっているのか、最近の実情を観察し、聞き取りをすることから始め、幼児の生活や遊びを発展させるうえでどのように絵本が使われているか、その実践を報告する。

2. 家庭における絵本とのかかわりの実態

(1) 調査目的と方法

家庭において絵本がどのように扱われているのか、保護者アンケートを実施し、その現状を把握した。田原赤石こども園、林丘幼稚園、豊橋才能教育こども園の3園の5歳児の保護者196名に対して、家庭でどのような絵本を与えているか、保護者が絵本の読み聞かせをする機会があるかについて尋ねるとともに、園で実施している絵本の貸し出しをどの程度利用しているかを調べた。(田原赤石こども園40名・林丘幼稚園62名・豊橋才能教育こども園94名)うち、回答数は(田原赤石こども園34名・林丘幼稚園48名・豊橋才能教育こども園81名)で、回答率は82.7%だった。アンケートは平成28年11月に実施した。回答は無記名とした。

(2) 調査結果

①絵本を購入する頻度

表1. 「ご家庭で絵本を購入することはありますか。どの程度の頻度で購入しますか。」

	田原赤石こども園	林丘幼稚園	豊橋才能教育こども園	合計
毎月2～3冊	1	0	6	7
月1冊程度	5	12	17	34
年に数冊程度	20	29	45	94
購入しない	8	7	13	28
合計	34	48	81	163

②家庭でこどもに与えている絵本の種類

表2. 「どんな内容の絵本をお子さんに与えることが多いですか。あてはまるものすべてに○をつけて下さい。」

	田原赤石こども園	林丘幼稚園	豊橋才能教育こども園	合計
物語絵本	17	27	54	98
科学絵本	2	5	7	14
生活しつけ絵本	3	4	11	18
文字・数の絵本	13	19	31	63
動物絵本	3	5	15	23
乗り物絵本	0	3	8	11
図鑑	11	18	31	60
その他	3	4	8	15

③家庭での絵本の読み聞かせの頻度

表3. 「絵本をお母さんやお父さんが読んであげてはありますか。それは、どの程度の頻度で行っていますか。」

	田原赤石こども園	林丘幼稚園	豊橋才能教育こども園	合計
ほぼ毎日	8	9	18	35
週1～3回	16	26	41	83
月に2～3回	4	10	13	27
月に1回以下	4	2	6	12
していない	2	1	3	6
合計	34	48	81	163

④園での絵本の貸し出しの利用状況

表4. 「園での絵本の貸し出しは利用していますか。」

	田原赤石こども園	林丘幼稚園	豊橋才能教育こども園	合計
毎週利用している	31	12	16	59
2週間に1回程度利用	1	23	22	46
月に1回程度利用	0	10	14	24
月に1回以下	1	2	24	27
利用していない	1	1	5	7
合計	34	48	81	163

(3) 結果と考察

絵本の読み聞かせは「表3」に示されるとおり、週に1～3回以上読み聞かせをしている家庭は72.4%で、この結果は平成23年度愛知県私立幼稚園連盟研究紀要に掲載されている「絵本の読み聞かせ」に関する調査で、週に1回以上読み聞かせをしている家庭が76.4%であることと比べて、漸減ではあるがほぼ同程度行われていることが分かった。

子ども向けの絵本を購入する頻度は、「表1」に示されるように、年に数冊程度が

一番多く、次いで月1冊程度が多かった。こうしたことから、子どもは家庭の中で定期的に新しい絵本を手にとり、それを親と一緒に見たり、読み聞かせをしている姿が窺がわれ、絵本とのかかわりの姿が日常的にあることが分かる。

親が子どもに与える絵本は「表2」で示されるように、物語絵本のほかに、文字・数に関するもの、図鑑などが多いことが分かる。今回の調査が5歳児に限定をしたことで、文字や数への興味が急激に増していく子どもの姿や、周りの事象を注意深く観察し、自分なりに考える力が育っている子どもの姿から、こうした文字や数の絵本や図鑑の需要が高くなっていることが背景にあると思われる。

さらに、表4で示したように、園で実施されている「絵本の貸し出し」の利用状況であるが、3園では、違いがみられる。この点について、それぞれの園で聞き取りをすると、田原赤石こども園では、毎週保育の中で絵本に触れる機会を設け、30分ほど図書室で自由に絵本を手に取り、自由に読むようにしていた。その後、家庭に持って返りたい絵本を選ぶようにしている。そのため、ほとんどの子どもが絵本の貸し出しを利用している。林丘幼稚園では、特に指定して保育の中で時間をとっているわけではないが、自由あそびの時間等に、図書室で絵本を読んだり、教師に読んでもらったりをしている。貸し出しについては、帰りの時間に保護者と一緒に図書室に行き、借りることができる。この幼稚園は、スクールバスがなく、全員、保護者の送り迎えであるため、子どもと保護者が一緒に絵本を選ぶシステムになっている。一方、豊橋才能教育こども園は、林丘幼稚園と同様に図書室利用をしているが、園児の8割以上がスクールバス利用のため、絵本を借りる際は、園児のみで借りに来る。そのため、貸し出しの利用率は低くなっていると考えられる。

以上のような点を考えると、絵本に親しむ機会は社会の変化ほどには影響されておらず、テレビ・DVD・スマートフォンなどの機器を生活の中で使いながらも、絵本のもつ良さについての認識は、保護者・保育者ともに、高いと思われる。

しかし、アンケートの回答の中で、「家庭で読み聞かせをしていない」「絵本の購入はしていない」「絵本の貸し出しを利用していない」の3項目すべてにあてはまるケースが6人あり、これらの家庭ではほとんど絵本に接することがないと思われる。今後、こうしたケースが増えることも予測されることから、園として絵本の大切さや読み聞かせの大切さを伝えていくことや、保育の中での実践の様子を保護者に向けて発信していくことが必要と思われる。

3. 園において絵本の読み聞かせはどのように取り組まれているか

(1) 調査の方法

3園の保育教諭並びに幼稚園教諭から聞き取りをして、どのような場面で絵本の読み聞かせをしているか、その実態を調査した。聞き取りは11月17日から12月2日にかけて、実施した。

(2) 絵本の読み聞かせの実態

田原赤石こども園と豊橋才能教育こども園の認定こども園では、園児は0歳児から5歳児まで在籍している。0・1歳児のクラスではクラスに乳児でも手にとることができる程の大きさの絵本を置き、毎日一回は手にとるようにしている。2歳児では、自由に絵本をクラスの本棚からとり、読むことのできる時間を日に2～3回とるようにしている。さらに、毎日、朝のあいさつの時間と帰りのあいさつの時間に読み聞かせをしている。読む絵本は子どもからのリクエストで読む場合と教師の側が選んで読む場合がある。

3歳以上では、上記の2園の他に林丘幼稚園においても、絵本の読み聞かせを毎日実施している。主に、朝の時間で実施しているが、他にも保育の導入や展開の場面で利用することが多い。3園とも、絵本は自由に園児が手にとることができるように、各クラスに本棚を置き、定期的に図書室から絵本を持ってくるようにしている。1週間でその絵本を返却し、また新しい絵本をクラスに持ってくる。さらに、図書室や図書コーナーには自由に出入りすることができ、自由あそびの時間などに随時利用できるようにしている。ここで他学年の子と交流したり、図鑑で調べものをしたりと、さまざまに利用している。

実際の保育中での出来事を以下の事例に著した。絵本はただ読むだけではなく、そこには子ども同士の交流や先生と子どもの交流の様子がある。大切なのは、互いに言葉を交わしあいながら、あたたかい信頼関係を築いていくところにある。

〔事例〕 1. 「せんせい！これ読んで」（4歳児）

図書室に集まっている子どもたち。4歳児のこのクラスは、給食が終わった後のこの時間、30分ほどの自由時間ができたので、先生と一緒に図書室にやってきました。「今日は、誰もいないや。」「この前、見つけた本、あるかな？」「そうそう、ぼくもその本探してたんだ。」と、口々に話しています。この子たちが探していた本、それは『100万回生きたねこ』という本でした。一人の子が「みつけたー！」と言うと別の子が「ぼくも読みたい。」と言って、本の取り合いになってしまいました。そうしていると、また別の子が「けんかしないでさー、先生に読んでもらおうよ。」と提案しました。「それがいい」ということで、先生に本を渡しました。「じゃあ、先生が読むからね。周りに集まって。」と先生。子どもたちは、先生が座ったイスの周りに集まって、静かに、先生が読んでくれるのを待っています。

〔事例〕 2. 「ぼくが読んであげるよ」（5歳児）

玄関の横にある図書コーナーには、自由遊びの時間になると、いろいろな学年の子たちがやって来て、絵本を読んだり、折り紙遊びをしたり、ゲームをやったりと、社交場の様相を呈します。3歳の子が本棚から『どうぞの椅子』という本を持って来て、机の上に広げて見えています。そばに居た5歳の男の子が「ぼく、この本、知ってるよ。」と言って、一緒に覗き込んでいます。しばらくすると、この5歳の男の子は3歳の子に向かって、「読んであげようか。」と言っています。3歳の子はちょっと困ったような顔をしていましたが、「うん、読んで。」と言って、本を渡しました。「よーし、読むぞ。聞いててね。」と緊張したような表情で読み始めました。近くにいた先生は、その様子を見ながら、そっと3歳の子のそばに行き、一緒に聞いています。

[事例] 3. 「この虫って、何かな」

園庭の隅の草叢から、5歳児のAくんが虫をとってきました。虫を入れた虫かごを大事そうにそっと手のひらの上にのせて、職員室にやってきました。「ねぇ先生、この虫、何っていうの?」「そうだねえ、先生もわからんなあ。」「そうだ、図書室の図鑑を見て来ようか。」「先生も一緒に行くね。」ということで、Aくんは先生と一緒に図書室にやってきました。「虫って、どの本にあるかなあ」とAくんは図鑑がいっぱい並んでいるコーナーへ行き、何冊かの本を引っ張り出しています。先生も一緒に何冊かの図鑑を眺め、Aくんと一緒に探します。本当は先生はどの図鑑に載っているかを知っていますが、Aくんが自分で確認して、自分で気づくのを待っています。Aくんと先生の会話は続きます。Aくんにとって、こうして先生と話しながら探すのが楽しいのです。「あつ、これかな?」「どれどれ、よく見てみようか。」などと話しています。

4. 絵本の読み聞かせから発展する保育活動

(1) 観察の方法

クラスの本棚に置いてある絵本には、このクラスでどのような保育活動をすすめていこうかという教師の意図や、子どもの興味関心に添っておかれているものもある。子どもにとっては自由感に溢れていることが大切であり、子どもたちが主体的にかかわり、考え、つくりあげていくことができる環境を構成するためには、絵本の読み聞かせは有力な保育ツールとなる。

ここでは、3歳児の事例と5歳児の事例についてとりあげたい。3歳児では、クラスの本棚にある電車の絵本を手にとって見ることから始まり、絵本を読み聞かせてもらうことを通して、電車ごっこへと発展していく過程を、5歳児では『三匹の山羊のガラガラドン』の物語の読み聞かせから劇あそびに発展していく過程を報告する。

(2) 電車ごっこ (3歳児 10月)

3歳児の「ちゅうりっぷ組」では数人の男の子が電車に興味をもち、園内の図書コーナーにあった電車の絵本をクラスの本棚に持ってきた。

[事例] 4-1. 「電車の絵本、あったよ」

ちゅうりっぷ組のBくんは、玄関のそばにある図書コーナーのところから、電車の載っている『しゅっぱつ しんこう』という絵本を持ってきました。「わあ、いいなあ。ぼくも絵本探してこよう。」とCくん。BくんとCくんは、揃って図書コーナーに行き、何百冊もある絵本の中から、電車の載っている絵本を探しています。絵本探しに没頭している二人。30分ほどすると、手に2冊の絵本を持って戻ってきました。初めは、自分たちで見えていましたが、クラスの幾人かが絵本に群がると、一人でじっくり見ることはできません。「先生、読んでよ。」とBくん。先生の周りに10人ほどの子どもが集まり、先生に絵本を読んでもらいました。絵本を読んでもらった子どもたちは、自分たちが電車になったつもりで、肩に手をおいて一列に並び電車を表現して遊んでいました。

子どもたちの電車あそびは翌日も続けられている。そんな時、保育室にあったおも

ちゃ入れとして使っているダンボールを電車に見立てて、箱の中に入る子、後から押す子などが現れ、電車ごっこをさらに遊びとして展開させたい様子がみられた。

〔事例〕 4-2. 「ダンボールの電車で、『しゅっぱつ しんこう』」

昨日の子どもたちの様子から、担任は家電屋さんに行き、大きな段ボールを何枚か貰ってきました。初めは、それぞれのダンボールに2～3人ずつ入って、幾両もの電車が思い思いに動いています。そのうちに、「電車、つなげよう。」という子がいて、電車ごとに連らなって歩くようにしています。しかし、すぐに離れてしまいます。ちょっとつまらなくなった子どもたちは、この日の遊びはそこでおしまいになりました。

電車をつなぎたいという思いはあっても、それをうまく表現できない3歳児。どうしたら遊びが広がるか考えた担任は、翌日、保育室にセロテープとはさみとひもを用意した。

〔事例〕 4-3. 「電車、つないでみない？」

3歳児の子どもたちには、セロテープなどの材料を使って、電車をつなげるという発想は出てきません。昨日と同じ遊びに終始しています。そのうちに、ひもを丸くつないで、電車のなわにして遊ぶ子ができました。「電車と合体～！」といって、ダンボールの電車に乗っている子の後ろになわの電車がつながります。「わあ、おもしろ～い。長い電車になったね。」とこの機会をとらえて、担任は子どもたちに声をかけました。

この後、しばらくは、つながって遊ぶという「電車ごっこ」が続いた。図書コーナーから、Bくんはまた新しい電車の絵本を持ってきた。カラーがよく映える紙質の絵本で、何人かの友だちで見ている。

〔事例〕 4-4. 「電車に色を塗ろう」

絵本で見たきれいな色の電車が印象に残ったのか、段ボールの電車にマジック・ペンや絵の具で、色を塗ろうということになりました。「どんな色がいいかな？」子どもたちの頭の中にあるのは東海道新幹線のような。「青と白がいい」ということで意見が一致し絵本を見ながら、青と白に塗り分けた電車をつくっています。

3歳児「ちゅうりっぷ組」の電車は、色を塗った電車で、廊下を通して、他のクラスや職員室にまで登場してきている。2週間目の終わりには、他のクラスの子も乗せて遊んでいる姿がみられた。絵本という教材を使い、子どもたち同士で絵本を眺めたり、先生に読んでもらったりしながら、イメージを共有して遊びを発展させる姿が見られた。

(3) 三匹の山羊のガラガラドンごっこをやろう (5歳児 11月)

5歳児「にじ組」では、4月から絵本を自由に手にとりクラスで読むことが習慣になっている。また、折りにふれ先生が絵本の読み聞かせも行っている。こうした経験から、子どもたちは絵本を題材として、劇遊びを行うことも多い。今回観察をする中、11月中旬から幾人かの子どもたちで劇遊びに発展させていった活動がみられた。

〔事例〕 5-1. 「ガラガラドンって、どんなお話だったっけ」

11月に入り、運動会も終えたこの時期、クラスの雰囲気も落ち着き、保育も各クラスそれぞれの持ち味を出して、時間をかけてじっくりと取り組む活動が増えています。にじ組では絵本を自分で見たり、先生に読んでもらったりする機会が増えています。Dちゃんたち女の子のグループが『三匹の山羊のガラガラドン』の絵本のことを話し合っていると、そこへ、Eくんがやってきて、「ねえ、ガラガラドンって何だったっけ。」と問いかけています。「このまえ、Eくんも読んでたじゃん。」と言われ、物語のストーリーを教えてもらっています。「そうだった、そうだった。ぼく、ガラガラドンやりたいなあ」とEくん。Eくんは、保育室にあった30cm ぐらいの台と50cm ぐらいの台を持って来て、その間に平均台で使う平板を渡しました。

はじめ、Eくんが一人で、この物語の舞台になりそうな山と橋をつくっていたが、そのうちDちゃんたち数人の女の子もそれに加わっていった。

〔事例〕 5-2. 「ガラガラドンごっこ、一緒にやる？」

舞台ができてしまうと、『三匹の山羊のガラガラドン』の絵本を持ってきて、物語をもう一度読んで確認しながら、どんな役が出てくるのか、どんな物語の展開なのかを話し合っています。大きな山羊と中くらいの山羊と小さい山羊、それにトロルという怪物。これらの役をこの数人で割り振り、劇遊びを始めました。「ねえ、何やってるの。」と周りの子たちもやってきます。「ガラガラドンごっこ、やってるんだ。一緒にやる？」とEくんは声をかけています。だんだんと、この遊びに加わる子も増えていきました。

こうして、遊びは展開していったが、山と橋と、その下を流れているはずの川を、もっとイメージにあうように作りたくなってきたのか、劇遊びは一時中断して、舞台づくりに専念し始めた。

〔事例〕 5-3. 「川は、どうやって作ろうか」

山に見立てた台の周りに色画用紙を貼って、そこに草や土の色を絵の具で塗っています。橋には茶色の色画用紙を貼りました。「川って、どんなふうになっていったっけ。」川については、いい考えがうかびません。「先生、川ってどうやって作ったらいいの？」と先生に助けを求めています。「そうだねえ、何かないかな。」と言って、子どもたちと一緒に教材室に行きました。そこで、セロファン紙やクラフトテープを見つけて、これを使うことにしました。

三匹の山羊のガラガラドンごっこは、クラス全員を巻き込んで、にじ組の保育室の半分近くを使って置いてある。今（11月下旬）は、山羊のお面や怪物トロルの衣裳を作っている。

今、にじ組は「劇遊び発表会」をするということで、他のクラスの子に見に来てくれるように呼びかけている。見るためのチケットづくり、劇の内容を書いたポスターづくりも始めている。

5. まとめ

絵本の読み聞かせを通して、幼児は絵本や物語に親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わうことができる。教師や友だちと一緒に聞いたり見たりすることで、皆と同じ世界を共有する楽しさや心を通わせる一体感が醸し出されることも多い。絵本を通して、自分の未知の世界に出会うことができ、想像の世界へ思いをめぐらせることができ、新たな世界に興味や関心を広げていく。また、どうしてという不思議さを感じたり、わくわくドキドキして驚いたり感動したりする心を育て、さらに悲しみや悔しさなどの様々な気持ちにも触れることができ、他人の痛みや思いを知る機会となる。

幼児が絵本に接する機会が徐々に減っていくことへの危惧を感じている中、今回、家庭でどの程度絵本に接しているかアンケート調査をしたところ、大きく変化していることはなく、保護者も絵本の大切さを理解し、親子ともども絵本に接し、楽しんでいる様子が窺われた。園の生活の中でも、絵本に自由に触れる時間が保障されている様子がみられ、それを保育活動に繋げていく姿があった。さらに、保育活動の一環として、保育の展開に絵本を使用して、幼児が主体的にかかわり、つくりあげていくことが、日々実践されている様子もみられた。

幼児の発達の特長として、信頼や憧れをもって見ている対象の言動や態度などを取り入れていくが、この対象は友だちや絵本の物語の登場人物にも広がっていく。このような同一化は、幼児の人格的な発達、生活習慣や態度の形成にとって重要なものである。幼児期の教育が、生涯にわたる人格形成の基礎を培う役割と考えられることから、絵本や絵本の読み聞かせという方法が保育において重要であり、今後の保育の展開のうえでも、より多く、より有意義に活用されることを期待する。